

西村郁子

わたしが大阪文学学校に入学したのは一九八七年の秋だった。前年に旧ソ連がチェルノブイリ原発事故を起こした。テレビを観ていたわたしは家族に向かって「世界が終わる前に貯金をはたいて遊ばないと！」と声をあげた。家族から「もう少し様子をみてからにしては」と止められたのはさておいて、この大事故が小説を書きたいという長年の夢を実行に移すきっかけになったのだと思う。

開校式は今と同じ、大阪文学学校がある新谷町第一ビル三階で行われた。校長は小野十三郎さんからバトンタッチした三井葉子さんであった。

本科は詩・小説合同クラス編成だった。そのためか、チューターとサブチューターの二人態勢でひとつのクラスを担当した。チューターは川崎彰彦さん、サブチューターは高田文月さんだった。当時、チューターだった方が現在も多く続けておられるが、高田文月さんもおひとりである。講師を先生と呼ぶないのは同じだが、文学学校ロゴ入り原稿用紙（200字）に鉛筆で書いていたことと、教室も喫煙OKで灰皿を置いて合評していたのもう過去の話になった。

川崎クラスは昼間部だったが、二次会は空堀商店街の中の

「すかんぼ」で行われた。川崎さんが店主に頼んで少し早めに開店してもらっていたのだ。そこでキムチやナムル、チヂミを突きながらビールや焼酎を飲む。初心者ばかりのクラスだから、皆、口々に川崎さんに質問を投げかける。そうすると、焼酎の入ったグラスをゆっくり傾けながら静かに答えてくださる。文人の風情漂うチューターに何でもいいから答えてもらいたかったのだらうと思う。

若かったわたしはその後、学生委員に名を連ね、毎夜、隣のお好み焼屋「DAN」でどこかの組会や仕事を終えた事務局長の高村さんや事務局員の伊藤さんと合流して飲んだ。そこではいつも文学談義が交わされていた。再び味わう学生の生活は楽しく、文学学校に入り浸った。まわりから「戦後文学」「第三の新人」という言葉が聞こえ、あの本は読んだか？これは知っているか？と誰彼なく訊かれた。一度、「DAN」で一緒になった倉橋健一さんに「お前は富岡多恵子も知らないのか！ 帰れ！ 死ぬ！」と叱られたことがある。また、別のときに同じ倉橋健一さんから「お前は螺鈿細工をやれ！」と突然言われたりした。今、思うに、わたしは向学心もなく寝ぼけた頭で文学集団の中に居座っていたのであり、倉橋健

一さんは相当お酒が入っていたのであろう。

このエッセイを書くのに昔のノートを引つ張りだしてきたら、読書会のメモ書きがあった。村上春樹の「ノルウェーの森」だった。報告の人が、最初に「この本は一〇年後に残っているのだろうか？」と問いを投げかけている。参加者の意見がどうだったのかは書き止めておらず分からないのだが、報告者は否定的に訊ねていたのであろうと思う。

偶然にも数週間前、職場近くのイベント広場で中古DVDが売られていた。そこで映画「ノルウェーの森」を買って観ていた。小説を読んだ印象と随分違ったと感じたが、三〇年前のわたしが持った感想は、恥ずかしくなるくらい浅かった。

次に出てきたのは一九八八年発行の樹林である。そこには「大阪文学学校創作科作品特集（二六期・一七期）」と題した学生の作品が載っている。残っていたのはわたしの作品があるからだ。タイトルは「深い川」。遠藤周作「深い河」より先につけたタイトルだということは断っておきたい。創作科としてるところから、専科や研究科と分けて選考していたのだろう。選考委員も兼ねていたのでどのような経緯で選ばれたか、うっすら記憶している。今の在特号のような厳正なルールはなく、一名の小説担当の編集委員がそれぞれよいと思う作品について意見を言ったのちに投票して決めたと思う。茶色く変色した樹林のページをめくっているうち、合評会のときの記憶が蘇ってきた。

最初にわたしの作品で発言に立ったのは、細見和之さんだった。細見さんはわたしと同じ歳だが、すでにサブチューター

Iをされていた。組会も違うのでわたしの作品を読まれるのは初めてだったと思う。家族をテーマに書いているが、タイトルにあるような「深い川」が描かれていないと感想を言われた。それをきっかけに、誰かが、どうしてこの作品が選ばれたんでしょうか？ となどと問い、選考委員のひとりが見られた。その人は「わたしもなんでこの作品が選ばれたのかわからない」と答えたものだから、会場はざわざわといった。 「作者は黙っている」が基本の文学学校のしきたりの中、わたしは気持ちの悪い汗をかいていた。そんなわたしを救ってくれたのは、同じクラスの三原后代さんだった。三原さんは編集後記を書いていて、なにより、わたしの作品を強く押し出してくれたのだ。編集後記には「描き切れていないという指摘もあったが、――中略―― 必死の思いを滲ませた筆力」とある。

このようにして、在校中に爪痕を残せたことを胸に元の世界に戻った……なら、よかったのだが、元の世界には戻らず、必死の思いだけで人生を生き延びてこられたような気がする。二年ほどまえから、チューターとして文学学校に戻ってきた。当時のわたしのような書きたい気持ちはあっても手がおぼつかない人に「大丈夫！」と励ますつもりでいたのだが、誰もその必要のない人ばかりで内心あせている。

最後に地下鉄谷町六丁目駅業業会館横の階段から文学学校に向かって歩き、空堀商店街に差しかかると必ず同じ匂いがする。食べ物匂いじゃない匂い。この匂い、三〇年前と同じなのである。